

山名

源矩豊

復刊号
(通卷第5号)



昭和61年 全国山名氏一族会結成総会



全国山名氏一族会 結成総会 昭和61年6月15日 於 但馬 山名寺

全国三千余の山名家に呼びかけ実施された結成総会には50名の方々が参加し、山名会の出発を期した。

全国山名氏一族会 会員章完成



H24総会にて制作することとなりました全国山名氏一族会の会員章（バッチ）が出来ました。会員の皆様には各家一個進呈致します。（径15ミリ）追加が必要な方は、事務局へお申し出下さい。（一個2,000円）

会誌「山名」第5号目次

第1回総会・第19回総会写真

全国山名氏一族会役員のご紹介

「山名」復刊に想う

燦然たる山名氏の系譜

一族会結成から衰滞と再興まで

エッセイ 応仁の乱と山名氏一族

『清和源氏諸流略系図』解題

―清和源氏諸流略系図―

大地に轟く山名軍団

俱利伽羅・五箇山への旅

用人席流『田公氏流三宅氏』

伊勢山名氏について

「仏」と「槍」と「五百年」

トピックス

総裁

山名義晴

宮田靖国

吉川廣昭

山名靖英

山名年浩

草山 宏

山名一男

吉川廣隆

山名大介

山名義範

59 57 56 50 42 34 30 28 22 12 4 2

「山名」復刊に想う

全國山名氏一族会総裁 山名義晴

会誌「山名」の復刊を心より喜んでおります。

ついては、この〈山名・やまな〉という二字三音の名詞に誘われて想い見たことどもを少々申し述べて、寄稿の責を果たしたく存じます。

まず左の写真「豊国公寿像」をご覧ください。

このお方はあまり人に知られておりませんし、ま

たご存知であつても、たぶん、優柔不断・破廉恥などの悪評によつてではないでしょうか。

公の時代は戦国末期の争乱で国中が常軌を逸した攻防に明け暮れておりました。山名の拠つて立つ山陰の地は東の織田（羽柴）、西の毛利の二大勢力に挟まれていて、簡単に去就を決することができません。紆余曲折の末選んだのが、

遠い織田よりも隣国の毛利でしたが、

これが裏目に出て、山名本国の但馬は没落、分国の因幡も落城寸前という悲惨な境涯に陥ります。その時の因幡守護職であつたのが豊国禅高公です。公は時勢と見抜き、單身鳥取城を出て東の羽柴陣に移りました。宗家の但馬山名氏が既に瓦解していますから、この

豊国公寿像（南宗寺旧蔵）



上分国の因幡山名まで抵抗すれば名譽ある山名氏
が断絶することは明白です。武門にとって家名の
存続が第一義ですから、これは豊国公苦渋の決断
に違いありません。

やがて豊臣時代になり、戦乱が収まりました。

豊国公は薙髮して禪高と名を改め、秀吉公の側近
となります。所領は但馬国の西部七美郡一円、一
万石足らずの謂わば祖先祭祀料です。入道された
のですから表面には出ず、連歌や茶道など文人と
しての教養を表芸に、秀吉・家康・秀忠の三公に
近侍されます。この身の処し方が江戸時代全期を
通じて、名門山名氏の名を世に知られることになる
のですから、謂わば公こそ山名氏再興の祖と称し
てよろしいでしょう。そのことを沢庵禅師はこう
述べておられます。

山可山非常山 名可名非常名・・・

なんと読むんでしょう。勝手読みで「山ハ山タ
ルベクモ常ノ山ニアラズ、名ハ名タルベクモ常ノ
名ニアラズ」とでもしておきましょうか。以下も
同様に、乱暴な意識を試してみました。

山は山でもありきたりの山ではない。
名は名でもどこにでもある名ではない。

山が世に知られるのは、(蓬萊山や普陀山の
如く)そこに神仙が住んでいるからだ。

山名という名声が保持されるのも、

そこに禪高公という神仙が坐ますからだ。

公は多田源氏の後裔、前因州太守

東林院殿徹庵高公なり。

一偈を以て寿容を賛えまつる。

手中風ハ冷シ一団ノ雪

膝下光ハ寒シ三尺ノ霜

紅塵ヲ截断シテ煩惱ヲ払フ

大地ヲ都廬シテ法身彰ナリ

嘎

元和七 辛酉 前大徳沢庵 南宗之室ニ書ス

印 印

以上です。

一族会の皆様方もそれぞれにお持ちの山名観を
この誌上にお寄せくださいますようお願いしてやみま
せん。

— 清和源氏の中で、最も連綿として続く —

燦然たる山名氏の系譜

宮田靖國

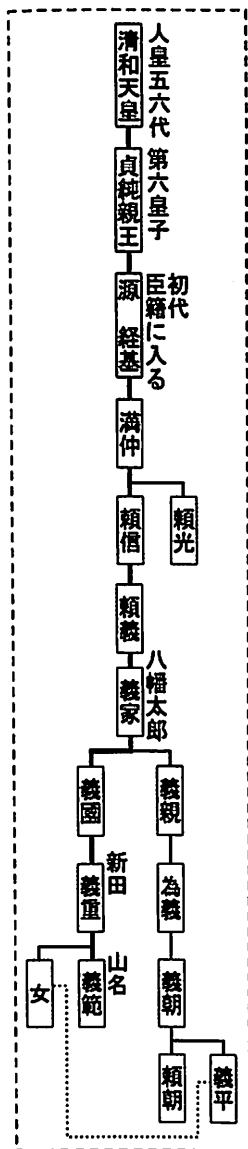
清和天皇第六の皇子・貞純親王の長子・經基王は臣籍降下して清和源氏の始祖と成り給うた。爾来、源家は満仲、頼信、頼義、義家と推移した。本家は義親、為義、義朝、頼朝と疾風怒濤の人生を生き抜き、ついに源家をして天下の主たらしめた。

一方、八幡太郎義家の三男・義国は故あつて下野国の足利の庄に住し、二児をもうけた。兄を新田義重、弟を足利義康という。新田義重は上野国

へ出でて新田の庄を領有し、地名を以て氏とした。晩年に至り、頼朝の挙兵に際し、三男の義範を名代として参陣させ、頼朝に近侍せしめた。その由縁は、頼朝の長兄・悪源太義平の妻は新田義重の娘であつたからである。

かくして、義範は源平の争乱に大功をたて、平家追討の褒賞に伊豆守に任ぜられた。これは、源氏受領六人の筆頭として書かれていたのである。

「吾妻鏡」に日く、(文治元年八月)



系図①、初代山名義範まで

ちなみに、次郎系統は、義範―義節―重国―重村―義長―義俊―政氏―時氏と続いた。

さて、義範八代の後胤・時氏が鎌倉幕府で有力な御家人であったことは時氏の「時」が、北条氏の通字であることから自明の理である。鎌倉時代、勝手に「時」の字を冠することは出来ない。

山名系図で、鎌倉期に限れば、「時」の字が付くのは時氏のみである。得宗・高時から偏諱を貰ったのであろう。ちなみに足利尊氏はこのとき、高氏と名乗っていた。上杉氏を介して山名時氏と足利高氏の母・上杉清子はイトコ同士である。つまり、時氏の母



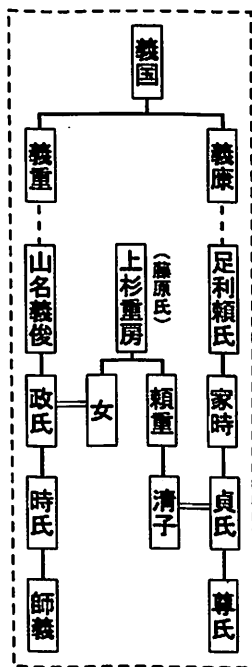
は高氏の母の伯母なのである。これから見ても、時氏が山名一族の棟梁であったことは明白である。時氏が

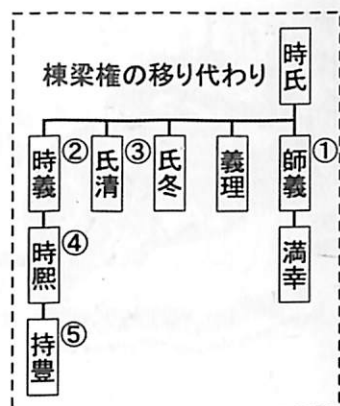
足利高氏に味方したのは、上杉頼重に頼まれたのであろう。勿論、太郎系統、三郎系統の人々は足利氏に付いたのか、新田氏に属したのかは定かではないが、三郎系統の中には、新田を名乗っている人もいたので、新田義貞に従ったのかもしれない。

ただ、新田氏は室町幕府には存在せず、足利を名乗る者は江戸幕府には見当たらず、細川氏は鎌倉幕府では在って無きような存在であった。武家としては、山名氏だけが鎌倉、室町、江戸時代と、あたかも万世一系の如く連綿として、今日に至っているのである。

かくて、南北朝の動乱期に、山名時氏は戦場往

系図③、時氏と足利尊氏





系図④

図中の番号は時氏以降の
惣領継承順を示す

来、千軍万馬の猛将であった。東奔西走、八面六臂の大活躍を演じた結果、丹波、丹後、因幡、伯耆、美作、五力国の太守となった。

嫡子・師義は驍将であつたから、但馬・備後を領国とし、それを猶子の時義に伝えた。しかし、時義が没すると、山名氏の棟梁権は師義の子の満幸や、時義の子の時熙に移らず、孫次郎義長が著した山名家秘伝の一卷『篠の葉集』を時氏が与えていた四男の氏清が受け継いだ。膂力絶倫の氏清の代に一族で、山城、和泉、攝津南半国（中島郡、東成郡、西成郡、住吉郡）、紀伊、出雲、隠岐、を加え、十二ヶ国半の太守護となり、六分の一殿

表①、山名歴代の守護国

棟梁	守護国	国数
時氏	丹波、丹後、因幡、伯耆、美作	五ヶ国
師義	丹波、丹後、因幡、伯耆、美作	七ヶ国
時義	但馬、備後	十二ヶ国半
氏清	丹波、丹後、因幡、伯耆、美作、但馬、備後、山城、和泉、摂津南半国、紀伊、出雲、隠岐	十二ヶ国半
時熙	但馬、因幡、伯耆、備後、安芸、石見、伊賀	七ヶ国
持豊	但馬、因幡、伯耆、備後、安芸、石見、播磨、備前、美作、伊賀	十ヶ国

と称され、侍所頭人にもなった。

当時、義満は天皇家から祭祀権と課税権を奪い、あまつさえ皇位を篡奪せんとした。後円融上皇は、永徳三（1383）年二月十五日、義満が治天の君を流罪にせんとしている、との側近の報に接し、悲嘆の余り、持仏堂に駆け込み自害せんとした。仙洞は震撼し、北朝の廷臣は、南朝から「朝敵

義満を誅戮すべし」との勅命を氏清に下されるよう策謀した。

長慶上皇は元中二（1385）年九月十日、

「右今度之雌雄、思の如くば、殊に報賽之誠を致すべし」

との御願文を、太上天皇寛成と自署して紀伊天野の丹生明神に納められた。

「南方紀伝下」に日く、

「南帝命刑部少輔顯連賜錦御旗氏清」。

氏清は御宸襟を安んじ奉らんと、義兵を挙げ、大逆罪の義満に天誅を加えんとした。これが、明

徳の乱の真相である。

内野の乾坤

一擲の戦で、

龍攘虎搏の

激闘を展開

したが、衆

寡敵せず道



山名氏清公

（武家百人一首・国会図書館蔵）

芝の露と消えた。戒名は宗鑑寺殿古鑑衡公大居士。翌年、義満は詐術を以て南北朝を合体したので、後円融上皇は、皇統が義満に断絶させられる危急存亡の秋が切迫したと絶望され、懊悩の極、翌明德四（1393）年四月二十六日、三十四才の若さで登霞された。

氏清の女婿であつたが、時熙は義満に味方したので、但馬、因幡、伯耆を安堵され、やがて、幕府の重鎮となり、伊賀、備後、安芸、石見を加えて七ヶ国の太守に返り咲いた。

その次が、史上名高い持豊、即ち宗全公である。

嘉吉の乱で、六代將軍義教を弑逆した赤松満祐を滅ぼし、その褒賞により、播磨、備前、美作を加え、十ヶ国の太守となり、応仁の乱では西軍の大將であつた。ちなみに言えば、応仁の大乱は細川勝元が企らんだ陰謀である。その証拠は「大日本史料」に、山名軍の着到は、細川軍の奇襲後7、8日を要し、備後や石見からは1ヶ月遅れて、夜を日に継いで馳せ参じたことが克明に記録されている。勝元は事前に極秘裏に細川軍を京に集結さ

せ、しかも山名宗全を最賈する將軍義政を監禁した後で、突如、山名軍を奇襲した。宗全は降りかかる火の粉を振り払っただけである。

次の教豊は応仁の乱勃発時、山名軍の陣頭に立ち、先陣を切つて東軍の急襲を邀撃したが、箭鏃雨飛の中を突撃して、流れ矢に当たり、壮烈なる名譽の戦死を遂げた。

山名宗全と細川勝元が踵を接して亡くなると、勝元の御台、即ち宗全の娘は両家の和睦に乗り出した。

「東寺執行日記」文明六（1474）年四月三日の条に曰く、

「同夜、細川聡明殿と山名少弼殿和睦治定之由風聞、此夜先、山名宮田殿御内垣屋以下五人馬引かせて細川殿へ礼被申、廳又細川殿師子草殿御内安富以下五人馬引きて、山名殿へ礼被出申、其後又聡明殿御母子山名殿へ御出、御酒有之由承及也」

と。山名少弼は政豊のことで、聡明殿御母子と

は、宗全の娘と細川政元のことである。かくて、政豊は聡明丸の後見役となり、山城国守護ともなった。即ち、山名政豊は聡明丸が元服するまでは、細川軍を指揮下に置いたのである。

とは言い条、応仁の乱後は、下克上であつた。嘉吉の乱の論功行賞で領国となつた播磨、美作、備前を赤松政則に奪還された政豊は文明十五（1483）年、3万の大軍を率い、真弓峠の天嶮を越えて播州を席捲し、書写坂本城を本陣としたが、光明寺合戦や英賀の戦いに敗れ、ついには坂本城の攻防戦となり、血河屍山を築きつつも撤退を余儀なくされた。長享二年（1488）、七月、山名が一敗地にまみれた。政豊は雄図空しく但馬に帰還した。

ところで、応仁の乱を無益な大乱と思う仁が居るが、これこそ、日本史上、最高最大の革命であつた。つまり、秀吉のような卑賤の生まれであつても、天賦の才能の持ち主、あるいは努力家が立身出世する世の中を招来せしめたのである。天地開闢以来、初めてのことであつた。これまでは門

地家格によって、位階官途は決まっている世襲制であった。

又、山名家に限って言えば、日野富子に義尚を頼まれたからであり、將軍を花の御所に閉じ込めた謀反人勝元の陥穽にはまっただけである。後土御門天皇の行幸は勝元の詐術偽計であり、西軍は南朝の小倉宮を奉戴した。

乱後、大樹義尚は、乱について「山名家に聊かも咎なし」と保障し、加之、「余が今日あるは山名家のお陰である」と感佩したのである。

閑話休題。政豊の後を継いだ致豊（ひさとよ）の代は播但国境を挟んで、龍驤虎視の狀態が続いたけれど、軍



山名持豊公

(本朝百人武将伝・国会図書館蔵)

事的には平穩無事であつた。

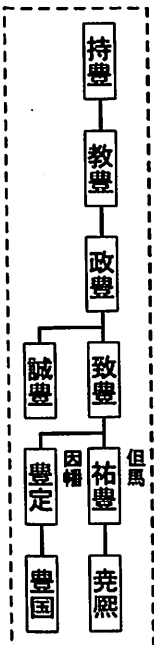
その舍弟誠豊が但馬守護となると、ゲルマン民族が陽光輝く地中海

を目指す如く、大永二（1522）年、又もや播磨に侵攻し、瀬戸内海附近まで制圧した。しかしながら、書写山への総攻撃に失敗した誠豊は、翌年十一月、但馬へと撤収した。これが山名氏の播州への最後の作戦となつた。

誠豊の後嗣は致豊の子・祐豊であつた。いよいよ戦国となり、天下麻の如く乱れ、切り取り勝手次第の阿鼻叫喚の末世であつた。天正八（1580）年の羽柴秀吉の但馬攻撃で有子城も陥落した。かつては殷賑を極めた山名家も盛者必衰の理から逃れられなかった。

以上は山名本家直系の系譜であるが、祐豊の後裔は江戸幕府の旗本として連綿として続き、現在に至っている。ただ、宗家としては因幡守護であ

系図⑤、持豊～豊国まで



った山名豊国の系譜に移った。なぜなら徳川家康が將軍職欲しさに、豊国によって同根同血の清和源氏を証左せんと昵近になったからである。家康の清和源氏は疑念が残るが、山名氏のそれは明々白々である。

ちなみに、豊国の父豊定は祐豊の弟であるから、血統上は微瑕すら無い。棟梁権が但馬守護家から因幡守護家に移ったにすぎず、それは江戸幕府すなわち徳川家康の決定であつたから正統な嫡流である。

豊国公以降の系譜は、藩侯菩提寺の法雲寺様が詳細に語つて下さるでしょうから、あちらにご照会願わしい。

尚、各ご分家の系譜は浅学菲才の身ですので、詳しくは知りません。各代は兄弟や子供が多く、各様の艱難辛苦だつたと思います。ちなみに、時氏の子供は十六人居たと言ひ、氏清の遺児は四十余人居たと、明徳記は伝えています。ですから、各分家のことは、ご分家のみぞ知る、です。

いずれにせよ、同根同血であり、もともととは、

はらから、ではないかと愚考致します。



H 2 4 総会での講演風景（東林院にて）

一族会結成から衰滞と再興まで

前事務局担当 法雲寺老廣昭

はじめに

このたび再興一族会総会が開かれますこと何にも増して有りがたく嬉しく存じます。

ついでには会の結成から沈滞までの経緯を今の世代の者に知らせてほしいとのご要望がありましたので、思い出すままに駄文を綴りました。老いの繰り言とお笑ください。

一、発端 禅高公350年遠忌と

13世義鶴公7回忌

私事で恐縮ですが、この寺（法雲寺）は世間から「山名さんのお寺」とか「お殿さんのお寺」と

呼ばれています。他の寺で育った私は縁あってその19世住職となったのですが、「人みな平等の今の世に何が殿さんや」などと白い眼をむいていました。然し間なしにそんな青くさい批判などしてはいられぬ事態がおとずれてきました。それは当寺の伝統として、村岡藩祖禅高公（山名氏第20代？宗家）350年の大遠忌を勤めることです。前回が大正15年でしたか今回昭和51年、すぐ目の前です。遠忌とは普通で言う法事に当たりますが、寺の場合は唯お経を上げて回向するだけでなく、堂舎の修改築や時にふさわしい記念事業を伴います。ここでは山名氏治下の政治・経済・文化…を今日的な視点から見直すことも必要となってきましたから、とても新米住職の手には合

ません

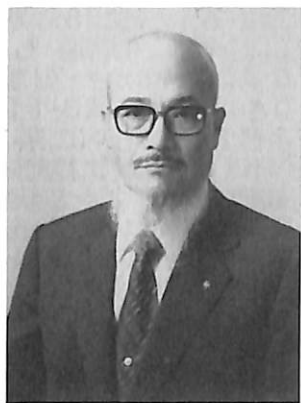
誰かよい相談相手はないだろうかと苦慮しているとき、救いの手を延べてくださったのが、山名宗家連枝の太田垣泰明氏(当会前理事長)でした。氏の物心両面に亘る絶大なご支援のおかげで、諸堂の昭和大修理や山名氏史料館の新築開館など数々の記念事業も無事に円成することができました。

そうした過程において、山名氏一族会結成の話がもちあがつてきました。

二、和歌山でまず一族会誕生

太田垣氏が仰いました。「わしの和歌山にも山名の子孫が仰山おるで、ひとつそれらを集めてみよまいか」

なんでも県北部には義理公よしまさ(六分一殿時氏公とよときの次男で紀州守護職)の後裔である吉増・吉松等を名乗る一統がいらっしゃるとのこと。うまくいかどうか気にする間もなく、顔合わせをするから出てくるようにと嬉しい便りをいただきました。



太田垣泰明前理事長

男女数十人が揃っておられます。お互いに名乗りあい、和氣霽々と祝杯をあげたものでした。昭和末年の頃です。

三、全国の山名さん調べ

こうなってくると私としてはジツとしておられません。広い世の中には和歌山の例のように山名のご子孫がいらっしゃるのは違いますが、どうすればその所在が判るだろうか。妙なことに山名氏の本拠である但馬の国には一軒も山名姓が見当たらないのです。それで姓氏に関する本を何冊か調べてみましたが、現存者の住所氏名等がわかるものは見当たりません。途方に暮れたとき思い

夢見心地で訪ねた会場の松林寺(この寺も太田垣氏の独力で新築された)の客殿きやくどうには錚々たる

ついたのが《電話帳》でした。地域別に管内加入者の住所氏名が掲載されていますね。飛びたつ思いで郵便局にいきましたが、全国すべての電話帳を揃えているのは特定の中央局しかないのと。私の場合では神戸の電電公社になりますが、それも閲覧はできても複写は駄目！です。

また行き詰まりました。しかし、これよりほかに調べようが無いとなると、無理にでもやらねばなりません。神戸に公社があるなら鳥取にもあるはず。鳥取なら但馬村岡から片道50キロ、日参可能と勇を鼓して出かけたのでした。

閲覧室の書棚一面をビッシリと全国の電話帳が埋めています。何百冊あるでしょうか。それを局ごとにめくってヤマナ・ヤマナと拾い出すわけですから、なかなかにはかどりません。そしてようやくに発見した山名さんのお名前と住所を書きとるのです。立ったままで何時間もこの作業をしている私の様子を見かねてか、係のお方が小机と椅子を提供してくださいました。また終わりの頃になると3時のお茶をいただくまでのご厚遇にすつ

かり感激したものです。初冬に始めた鳥取通いは厳冬積雪の頃も続きます。雪道のドライブはヒヤヒヤものですが、作業の方もだんだんに進んできまして、関東・東北・北海道・九州にまで辿りつきました。沖縄を最後に3000名近い山名さんを調べ上げた時は早春の陽がかがやいておりました。

四、全国山名氏一族会の結成

次の作業は会設立の趣意書や参加申込書などの作成と発送です。この大量の封書にどれほど応じてくださるか、これも全く見当が付きません。一週間たち一ヶ月過ぎました。初めの頃は配達不能の付箋付きで戻されるものばかりでしたが、そのうちに回答書状が届くようになりました。3通・5通・日によっては10通もの束がドサツと郵便受けから出てまいります。

「ヤッター！」成功です。回答数300通。回答率10%、見ず知らずの者からの突然な申し入れに、さぞ不審の念をおこされたであろうに、没

S61 第1回総会



全国山名氏一族会 結成総会 昭和51年6月15日 於 徳島 山名寺

になさることなく、お応えくださったこの10%は、全国の皆様の山名氏に対する敬慕と一族相互の親愛の念が込められているのです。その尊いお気持ちを戴して、次の段階に向かわねばなりません。総会の段取りです。

会場・議題・日程・見学先・交通の便……。この寺は兵庫県の中でも西北の中国山脈のど真ん中にあります。交通の便も至って不自由ですから、東西からの集合には不適當であることはよく解っておりますが、最初だけは此処で無ければなりません。何故なら当

寺には800年の昔の山名氏太祖無上覚院殿義範公以来嫡々30代に亘るご歴代をお祀りしているからです。無理を承知の上、1泊2日の計画

を300名の回答者にさし出しました。恐らく遠方のお方は無理だろうと思っていました。なんと西は鹿児島や福岡、東は静岡・東京とほぼ全国から50名近くの申込を得ました。ほかに委任状出席もあつて、一族会結成の提案は満場一致で可決。直ちに結成準備会を結成総会に切り換え、会則・役員・事業などが決まりました。時に昭和61年6月15日です。

H4 第7回総会



平成4年6月6日 第7回全国山名氏一族会総会 鳥崎山名八幡宮

五、以降の主な活動

(以降は文体を改め、事象のみを列記する)

①総会

回	期 日	主会場	宿 泊	行 事 ・ 見 学 先	参 加
1	S 61 / 6 / 15 16	但馬村岡	湯村温泉・井筒屋	一族会結成総会、円通寺・総持寺・竹田城	48名
2	S 62 / 5 / 16 17	京都市内	妙心寺・花園会館	東林院禪高公御廟・眞乗院宗全公御廟参拝	63名
3	S 63 / 5 / 28 29	伯耆倉吉	三朝温泉・依山楼	時氏公御廟、山名寺、田内城、打吹城	59名
4	H 1 / 4 / 22 23	但馬村岡	日和山温泉・金渡楼	壺溪御廟、竹田城山名赤松合同慰霊祭	60名
5	H 2 / 5 / 26 27	但馬竹田	グリーンピア三木	山名赤松両軍慰霊塔落成式、多田神社	52名
6	H 3 / 6 / 8 9	但馬村岡	浜坂温泉・保養荘	山名蔵開館式典列席、楞嚴寺、鳥取城	100名
7	H 4 / 6 / 6 7	群馬高崎	伊香保温泉・H木暮	山名八幡宮、山名城址、新田氏史跡等	70名
8	H 5 / 5 / 29 30	堺和歌山	和歌浦・萬波	南宗寺、松林寺、興国寺	55名
9	H 6 / 5 / 28 29	備後福山	鞆の浦・サイドH	神辺城址、天寧寺、西国寺、千光寺	50名
10	H 7 / 10 / 14 15	京都市内	東山・ホテル東山閣	六孫王神社、長福寺、東林院、眞乗院、相国寺	52名
11	H 8 / 5 / 25 26	作州津山	奥津・奥津温泉H	津山城、岩屋城、多聞寺、院庄館	43名

12	H 9 / 5 / 10 / 11	鎌倉伊豆	熱海温泉・H池田	長谷寺、大仏、鶴岡八幡宮、修禪寺	25名
13	H 10 / 3 / 7 / 8	出石豊岡	城崎温泉・西村屋	山名氏シンポジウム、此隅山城、総持寺	40名
14	H 11 / 5 / 16	京都市内	日帰り	東林院禪高公廟、長福寺宗全公灰塔	34名
15	H 12 / 11 / 11 / 12	群馬高崎	サンピア高崎	山名人幡宮、反町館、永福寺、生吉神社、大光院	35名
16	H 13 / 11 / 23 / 24	京都周辺	京都厚生年金休暇村	眞乗院、妙心寺、京都周辺関係史跡	37名
17	H 14 / 11 / 16 / 17	倉吉鳥取	ウエル鳥取やじつ荘	山名(三明)寺、鳥取市内史跡見学	29名
18	H 15 / 5 / 31 / 6 / 1	但馬村岡	湯村温泉・ゆめ春来	法雲寺・円通寺・出石・竹田城	28名
活動停滞期 H 16 ~ H 23 の約 7 年間					
19	H 24 / 10 / 20 / 21	京都市内	西京エミナース	東林院、眞乗院、等持院	30名
20	H 25 / 10 / 12 / 13	出石竹田	出石グランドH	宗鏡寺、出石神社、竹田城	

* 15 ~ 18 回総会は東京の事務局において実施、19 回総会は再興準備会企画。

②山名史の研究

山名氏の成立以来今日で800年、その間に積み重ねた功罪の数々を学問的な立場から鮮明にすることが、山名氏由縁の者にとつては何よりも必要である、然し歴史学に疎い吾々が勝手に動きまわることば僭越であり危険。ここは斯学の権威者

に教を乞うこと、その指導・指示に依つて身分相応の運動をおこすことであろう。そうした視点から次の碩学各位にご協力を仰いだ。

鳥取県史専門委員 小坂博之氏

鳥取大学教授 山中寿夫氏

関学名誉教授 永島福太郎氏

専修大学教授

太田順三氏

つくば大学教授

山本隆志氏

村岡高等学校教頭

山本茂信氏

但馬史研究会

但馬考古学会

県立但馬文教府

高崎市史編纂室

——以下略——

山名氏に縁故がある社寺のご協力も忘れてはならない。

山名八幡宮

高崎市

太祖義範公勧請

壺井八幡宮

羽曳野市

河内源氏の氏神社

六孫王神社

京都市

源経基公を祭祀

多田神社

川西市

多田源氏の氏神社

聖護院門跡

京都市

伯耆山名氏由縁

南禅寺眞乗院

京都市

宗全公御廟所

妙心寺東林院

京都市

禅高公御廟所

梅津 長福寺

京都市

宗全公終焉の寺

由良 興国寺

和歌山県

義理公出家の寺

尾道 西国寺

広島県

山名一族中興の寺

——以下略——

また、山名氏研究に不可欠とされる次の図書類も見落としてはならない。

山名豊国

小坂博之著

山名常照と禅刹

小坂博之著

山名家譜

宮田靖國編

山名氏八百年

山名氏一族会著

全国山名氏一族会報

①～④号

山名赤松研究ノート

①～⑨号

③山名赤松両氏顕彰会

中世室町幕府の頃、山名赤松の両氏は幕府最高の三管四職に列し武威を競った。領国もまた隣同志である。山名は兵庫県の北半分、但馬を本貫とし、赤松氏は南半分の播磨国が地盤である。赤松満祐が六代義教將軍を謀殺した《嘉吉の変》で追討に向かった山名宗全は播但の国境を押し破り、赤松勢を駆逐した。播磨国は山名領に組入れられる。

しかし勢力を盛り返した赤松勢は失地恢復に向

かつて心血を注ぐ。勝者の奢りと敗者の猛攻で播州全域に熾烈な戦火があがる。5年たち10年を過ぎると赤松勢は優位に立ち山名勢を追い払う。

そうした攻防から100年、戦国末期の織田勢（実態は羽柴勢）が中世の名門山名氏を降し、宗全公苦心の但馬竹田城も接収された。新しい城主は播州竜野から移された赤松広英（広秀）公。山名氏が築き、赤松氏が貰う。

貰った広英公も関ヶ原のあと、わずかな失策をとがめられて切腹という悲劇。虎臥城とよばれる山顛の石垣は『荒城の月』さながらに今も歴史の無常を物語っている。

そうした山名赤松両軍由縁の竹田城に両氏和睦の証をもうけたら如何。浅野と吉良の両方が握手したではないかという声が何処からともなく湧き出した。そこで赤松氏側の内意を伺ってみるとまんざら無関心でもないらしい。意を強くして赤松氏の代表と目される数人と個別に摂渉——赤松氏には一族会という組織が無い——を開始し、運動の輪を徐々に拡げていった。

かくして成立したのが『山名赤松両氏顕彰会』である。故に山名氏一族会は二つの顔をもつこととなった。

両氏協議の末、竹田城趾に両軍慰霊塔を建立し、末永く奉祀しようという意見が一致した。

塔の種類や型状は事務局一任と、これまた重いお仕事を仰せつかったが、逃げるわけにもいかなないので、兎も角その仕事に立ち向かった。

山名といい赤松といい、中世以来の名門であるだけに、チャチな代物は造れない。100年く200年と後世に伝えて恥ずかしいだけのものとなると、塔という石造美術の研究から、各地に奉安されている実物を見て回る順礼を繰り返したりした結果、ようやくに決まったのが、城崎温泉寺奉祀の宝篋印塔（国重文）を範とする案である。

次は設置場所だ。竹田城内は文化財法により駄目、城から離れた場所では設置の意味がない。此処でも不思議と有難いご協力者が現れ、中腹駐車場の隣り、城壁を見上げることができる格好の地

を入手することができた。施工は当地石材業界の
トップ神鍋石材さん。

平成2年5月26日、山名赤松両氏・地元有志
100余名参加のもとに盛大な供養塔開眼式を挙
げた。

④著名人士のご支援

こうした一連の事業を推進するに当たって、両
氏の会員以外から、思いがけぬ而も強力なご支援
を戴いた。ひとえに両氏のご先祖が残された偉業
の賜たまひであろう。今ご芳名を挙げて甚深の謝意を
表するものである。

(1) 宗教界

天台座主

山田恵諦 猊下

青蓮院門跡

東伏見慈洽 猊下

臨済宗相国寺派管長 有馬頼底 猊下(赤松氏流)

臨済宗南禅寺派管長 柴山全慶 猊下

臨済宗妙心寺派管長 梶浦逸外 猊下

比叡山延暦寺執行 小林隆彰 導師

(2) 政財界

元兵庫県知事

阪本 勝氏(奉賛会長)

兵庫県知事

坂井時忠氏

元兵庫県知事

金井元彦氏(赤松氏流)

鳥取県知事

石破 茂氏

鳴門市長

山本幸男氏(赤松氏流)

自民党幹事長

二階堂 進氏

民社党委員長

西尾末広氏

民社党書記長

佐々木良作氏

民主党参議院議員

田渕哲也氏(法雲寺檀徒)

民社党衆参両院

議員一同

※山名宗家先代・義鶴公は民社党
の重鎮であられたため。

山陰木材社長

田渕寿雄氏(法雲寺檀徒)

玄明文庫社長

濱田義明氏(村岡出身)

大阪村岡人会会長

池尾泰治氏(村岡出身)

岡村縫製社長

岡村精一郎氏(竹田有志)

六、事務局の東京移遷と衰退

一族会も発会后10年以上経てば新味が薄れてくる。これを甦らせるために事務局を東京に移し、担当者も陣容を改めることになった。平成15年のことである。

新しい事務局では理事長制を改め会長制にし、運営担当者を常置するなど、先々の発展が期待された。会の機関誌「山名」が刊行され、総会も新角度から開かれる等々。

然し不幸なことが突然湧き起こった。総裁様突然のご発病入院。それも長期に亘るらしい。加えて会長氏も後を追うように入院されるという二重の傷手を受けては、あとの運営同人方も為す術がなく空しく月日を消費する破目となった。

そうした事情がわからぬ全国の会員方からは、当局の怠慢を咎める電話や書状が、元の事務局（私の所）へ頻々と入ってくる。やむなく、新事務局に代わって弁解の文書を出すなど、辛い数年に

耐えねばならなかった。

七、再興準備会招集

こうした苦境からの脱出——一族会の再興——を最も願われたのが和歌山太田垣氏。その情熱が輪を拡げて阪神間の山名年浩・宮田靖國両先生に及び、遂に待望の一族会復活を見ることが実現した。山名氏一族会再興準備会招集：平成24年に山名会再興総会開催を決定。平成23年9月のことである。

以上、発会から今日までの当会の足跡をあらましたどつてみた。参考になるかどうか。ともあれ新一族会のご発展を願ってやまない。

山名赤松供養塔



— 若い世代に語る応仁の乱と山名 —

— エッセイ — 応仁の乱と山名氏一族

山名靖英

先日、学校から帰ってきた孫娘が、私のもとにやってくるまで開口一番、

「おーちゃん（私の愛称）！山名って有名やなあ！学校で、『応仁の乱』って習ってん。山名宗全って私たちの先祖さんやなあ！」と。

「そうや！詳しいことは分らんけど、おーちゃんのおじいちゃんから聞いたことがあるで。」と私。「学校で習ったけど、もう少し知りたいねん。」
「そしたら、一緒に勉強しよか。」となつてしまった次第である。

孫「歴史の教科書に出てたけど、応仁の乱って、1467年から1477年の11年間に亘って、

山名持豊（宗全）と細川勝元が京都を舞台に戦った。と書いてあったよ。」

私「そうなんや。時は室町時代の応仁元年に始まったから、応仁の乱っていうんだ。京都には、西陣はじめ、当時の遺跡が残されているよ。」

孫「戦争って嫌やけど、なんで戦いが始まったの？」

私「戦争はやってはいけない悪の行為だけど、避けられない理由があるようなんだ。応仁の乱が始まった原因は、一口に言って代理戦争といえるんだよ。その当時は室町時代で、日本の国を治めていたのが、8代将軍足利義政だったんだ。」

孫「へえ。その室町時代って長く続いたんでし

よう？」

私「そう、1378年から1573年まで続いたから、約200年だね。足利尊氏が征夷大將軍になつてからだが、3代將軍足利義満が京都の室町に邸宅を構え、政權の中心としたことから、室町幕府と呼ばれているんだ。」

孫「そうなんだ。ところで、なんで、戦争になつたの？」

私「そこなんだ！当時は常に権力争いが日常茶飯事だったんだ。権力を手に入れたり、保ち続けるためには、わが子でも、兄弟でも、親族でも、犠牲にしたんだ。政略的に、娘を嫁がせたり。」
孫「怖いよね！そんな時代に生まれてこなかつてよかった」

私「応仁の乱というのは、そのような時代背景の中、8代將軍足利義政の後継をめぐつての争いなんだ。」

將軍義政には後継ぎとなる男子がいなかった。だから義政は、自分の弟の義視よしみを9代將軍にする
と約束したんだ。ところが、皮肉にも、その後には

義政の正室であつた日野富子との間に男の子が生まれたんだ。それが義尚よひなという。

男子が生まれたから当然9代將軍は義尚となるよね。でも、すでに約束された義視にとつたら面白くない。だから、自分を応援してくれている、当時、東軍の大將だつた『細川勝元』に泣きついたんだ。一方、義尚側は、当時、西軍の大將だつた『山名持豊』の応援を求めたんだ。加えて、同時におきていた畠山家の相続争いもからんで、戦いが始まつた訳だよ。

だから、応仁の乱というのは、山名宗全と細川勝元が直接いがみ合つて起こした戦ではなく、権力者の相続争いに巻き込まれた代理戦争といえるんだ。」

孫「でも代理戦争といつても、戦争は戦争でしょう？」

私「代理は代理で、本戦ではないよ。全面戦争を避けるためなんだ。」

孫「そうか・・・。複雑だったんだ！ところで山名氏というのは、いつごろからあつたの？」

私「山名氏の歴史は古く、歴史研究家の宮田靖国先生は、『清和天皇第六子である貞純親王の長子・経基王（六孫王）が清和源氏の始祖となられた』と述べられている。（当刊、宮田氏文章参照、以下同様）

源氏といえば、源の頼朝や義経など、有名だね。まさに武家の名門であった清和源氏の支流で、新田義重の子義範という人が上野国多胡郡山名に住んで、山名三郎と名乗ったことが山名の始まりとされているようだ。」

孫「へえ！すごいなあ！」

私「山名義範は、頼朝の挙兵に参加し、源平の合戦に活躍、平家討伐に貢献したんだ。その恩賞として、伊豆守に任ぜられている。これは、『吾妻鏡』に出てくるんだ。その後、北条の陰謀に会い、辛酸をなめたが、激動の中生き抜いた。特に、山名時氏の時代には、南北朝の動乱期であったが活躍し、丹波・丹後・因幡・伯耆・美作など5ヶ国の太守となっている。さらに、氏清の代では、12ヶ国の大守護となり、『六分の一殿』と称され

ているんだ。その後、持豊の時代と移るんだが、このことは、『山名家譜』に書かれているよ。

孫「この時代、生き残ることは大変だったんだよね。」

私「話は『応仁の乱』に戻るが、実は、この乱を仕掛けたのは、細川氏なんだ。だから、山名側は、細川勝元の奇襲に、かなり遅れて挙兵したが緒戦は敗退した。『応仁記』に詳しく述べられている。ともかく山名は受けて立った。

このことに宮田先生は、『山名家譜』の中で詳しく触れられている。『山名は伝統的に、こちらから何もしない。しかし、理不尽な侮辱や攻撃を仕掛けられたら必ず反撃する』と。

ともかく、戦は11年間にわたって続いたんだ。その間、敵味方が入り乱れて、昨日味方だった陣営が、今日は敵陣営に“鞍替え”するという、複雑怪奇の戦いとなったそうさ。“人心は移ろいやすい”というが、自分の利害で味方をも平気で裏切る。あっちにいたり、こっちにいたり、が繰り返され、結局は、山名宗全も細川勝元も病死

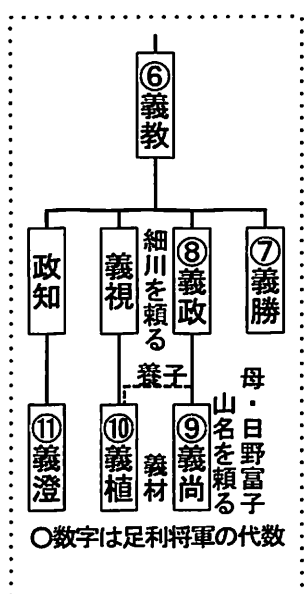
してしまい、明確な決着がつかないまま終わった
ようなんだ。」

孫「へえ！そうなんだ。それで、後継ぎ問題は
どうなったの？」

私「第9代將軍には、山名陣營が応援した義尚
がついた。だから、その意味では、山名宗全側が
勝ったといえるかもしれないね。」

孫「その後は、うまくいったの？」

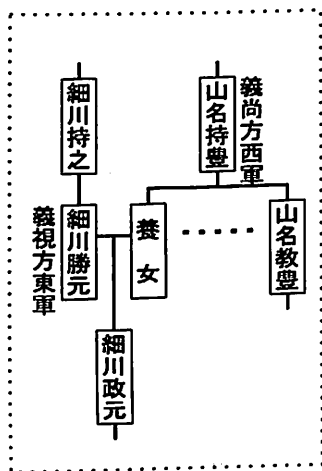
私「ところが複雑なんだ。9代將軍の義尚は、
その後の戦いの最中に病死した。25歳の若さだ。
しかし、後継ぎがいなかったため、争いの相手だ
った義視の子の足利義材（義植）が義政の養子と
なって10代將軍になるんだ。」



足利系図 (部分)

孫「ややこしいなあ！」(笑)

私「そうなんだ！これが当時の権力争いの典型
と言えるんだよ。もつとややこしいのは、その後
だ。義尚というのは日野富子の子供だろう。だか
ら、日野富子は山名宗全の手を借りて8代將軍義
政の後継にしようとした。一方で、弟の義視を將
軍にしようとしたのが細川勝元。なんと、その争
いの本家である日野富子と、細川勝元の子供であ
る細川政元が手を組んで、10代將軍の義材を失脚
させるんだ。そして、11代將軍には、義政・義視
の異母弟の子（義澄）を据えるというややこしさ
だ。その後、いろいろあって（笑）義材が復帰す
るが、後継争いにまた負けて將軍職を追われる。



細川と山名

という流れになるんだ。」

孫「もう分らなくなつた！どうでもよくなつた。」(笑)

私「これが、その後突入する戦国時代の幕開けの様相なんだよ。だから『戦国時代』というのとは、ある意味で、権力者の保身だけの意味で明け暮れた時代で、その陰でいつも脅え、犠牲になつてきたのは庶民だつたといえるね。」

孫「なんか、山名家というのとは、損な立場みたい！応仁の乱って何か意味があつたの？」

私「うん。宮田先生によると、この乱までは、『門地家格によつて位が決められ全て世襲制であつたが、応仁の乱以降は、どんな身分の人でも、努力すれば立身出世できる道を作つた』という。

だから、応仁の乱というのは、(結果的に)『日本の歴史史上、最高最大の革命であつた。』といわれているんだ。また、乱後、義尚は、『山名家に聊かも咎なし』、『余が今日あるは山名家のお蔭である』といわれていたというんだ。

その後の山名氏は、戦国時代という動乱の中で

も、江戸時代も、今日まで、質素儉約に努め、正直に、愚直に生きてきた。近世初頭の禅界に名をはせた沢庵和尚が山名豊国公に贈つた讃辞が残されている。

山可山非常山

山は山でもただの山ではない

名可名非常名

名は名でもつねの名ではない

有山名之名

ここに山名という一族がある

眷其旅派

その棟梁は

多田源氏后裔

多田源氏の后裔

前因州大守也

さきの因州大守である

大守謂誰

大守誰ぞ謂わん

東林院殿徹菴公也

東林院殿徹菴禪高公なり

(「山名家譜」より)

山名氏一族を高く評価した一文だよ。主君には忠実に仕え、自らの生き方には謙虚で、人を裏切らず、貶めず、筋を通した生き方に徹したのが、山名氏だ。本来なら、清和源氏を姓の初めとして、幾多の家伝・文献、史跡が残されて当然だが、な

ぜか山名氏を語る文献資料は少ない。『山名家譜』の巻末に、宮田先生が述べられているが、『応仁の乱について、なぜ、かほどの正当性があるにもかかわらず、山名の人々は西軍から見た乱の顛末を記したものを残さなかったのか。』(中略) 答えは一つ。書く必要がなかったからである。つまり、自己弁護する必要も、うしろめたさも何もなかったのである。』と。

「お前も山名一族の誇りを持って頑張らないといけないよ！」

孫「うん。よく分かった！私も、山名氏に自信を持って生きていくわ！」

参考資料

yahoo 武家家伝より

同百科事典より

冊子「山名」「山名家譜」 宮田靖国氏寄稿



西陣碑 (京都市上京区)



「応仁の乱勃発地」(上御霊神社)

清和源氏諸流略系図解題

山名年浩

封建社会の領主と地主の關係は武家政権の時代に大きく展開していった。鎌倉幕府の守護は軍事と行政の任務を与えられていたが、当初は徴税権を持たなかった。鎌倉幕府の後半期からは莊園領主を取り込んで徴税権を得て地方領主化していった。

続いて、室町幕府における守護は守護大名と呼ばれた。守護大名は幕府の權威を背景に領国を支配していった。守護大名35家は次のようになっている。斯波氏、畠山氏、細川氏、一色氏、赤松氏、京極氏、山名氏、北畠氏、土岐氏、今川氏、大崎氏、伊達氏、武田氏、小笠原氏、上杉氏、佐竹氏、六角氏、仁木氏、宇都宮氏、小山氏、結城

氏、千葉氏、富樫氏、大内氏、尼子氏、毛利氏、河野氏、渋川氏、大友氏、少弐氏、阿蘇氏、菊池氏、島津氏、宗氏。

変わって、戦国大名はこの守護大名から転進した者や守護代が権力を握った者、国人層から成り上がった者とさまざまであった。守護大名との違いは自らの実力（武力や経済力）を前面に支配をしたことにある。

征夷大將軍は鎌倉・室町・江戸の三つの幕府とも清和源氏が担うことになったことは周知の事実である。当然、平氏以後の武家の棟梁としての位置は高く、大名の数においても多数となっている。ただ、源氏の將軍は源義仲が嚆矢であるが、源氏

以外の家系からの將軍もいたことは確かである。
鎌倉・室町・江戸の三つの幕府を通じて存在した
のは山名氏である。

江戸時代になってからの大名家の系譜は清和源氏125家・宇多源氏11家・村上源氏4家・嵯峨源氏3家・桓武平氏11家・越智氏6家・大江氏7家・安倍氏2家・滋野氏1家・丹治氏5家・藤原氏87家・菅原氏9家・大藏氏1家・多々良氏1家・紀氏3家・児島氏1家・良蜂氏1家・豊臣氏2家の等280家(藩)の流れが見て取れる。無論、清和源氏が約45パーセントを占めている。

「源」のいわれは北魏の世祖が同族の優位な青年に「源」の姓を与えたのが始まりで、日本では嵯峨天皇の子女50名中33名を臣籍にしたことに始まる。この中で、公家として栄えたのが村上源氏で、武家として栄えたのが清和源氏である。

なお、各家によって同じ一字を名として続ける習わしも見て取れ、興味深い。たとえば、山名氏

の豊、島津氏の久、浅野氏の長、京極氏の高、織田氏の信、伊達氏の宗などがそうである。

本略系図では清和天皇以後中世末までの69家を表しており、それ以後の家は割愛している。また、各家の細部に渡る分岐は含んでいない。この期間(880年〜1600年)の清和源氏の展開状況を一覧することを目的としたものである。

会誌「山名」第5号発行につき山名年浩氏に「清和源氏諸流略系図」のご提供を頂きました。

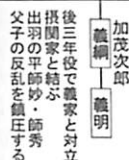
掲載にあたって事務局にて、「平家追討源氏六人」・「御門藥武将」等の目印と、最近判明した山名の諸氏を若干追加させて頂いて居ります。

貴重な史料を快くご提供下さいました山名年浩氏には
深謝申し上げます。

事務局

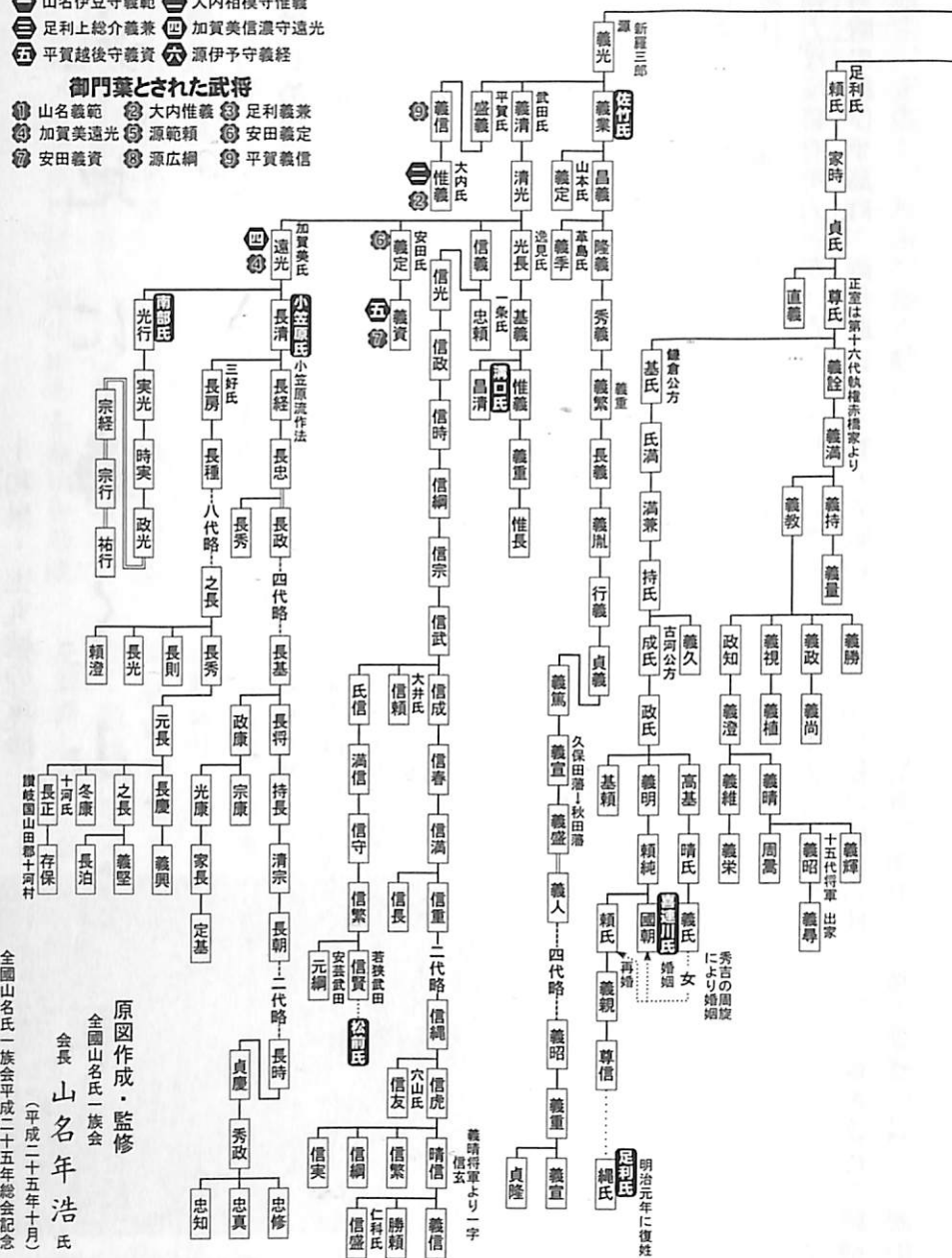


〇〇氏は養子関係を示す
 〇〇氏は近世大名家を示す
 〇〇氏は御門葉とされた武將
 〇〇氏は平家追討源氏受領六

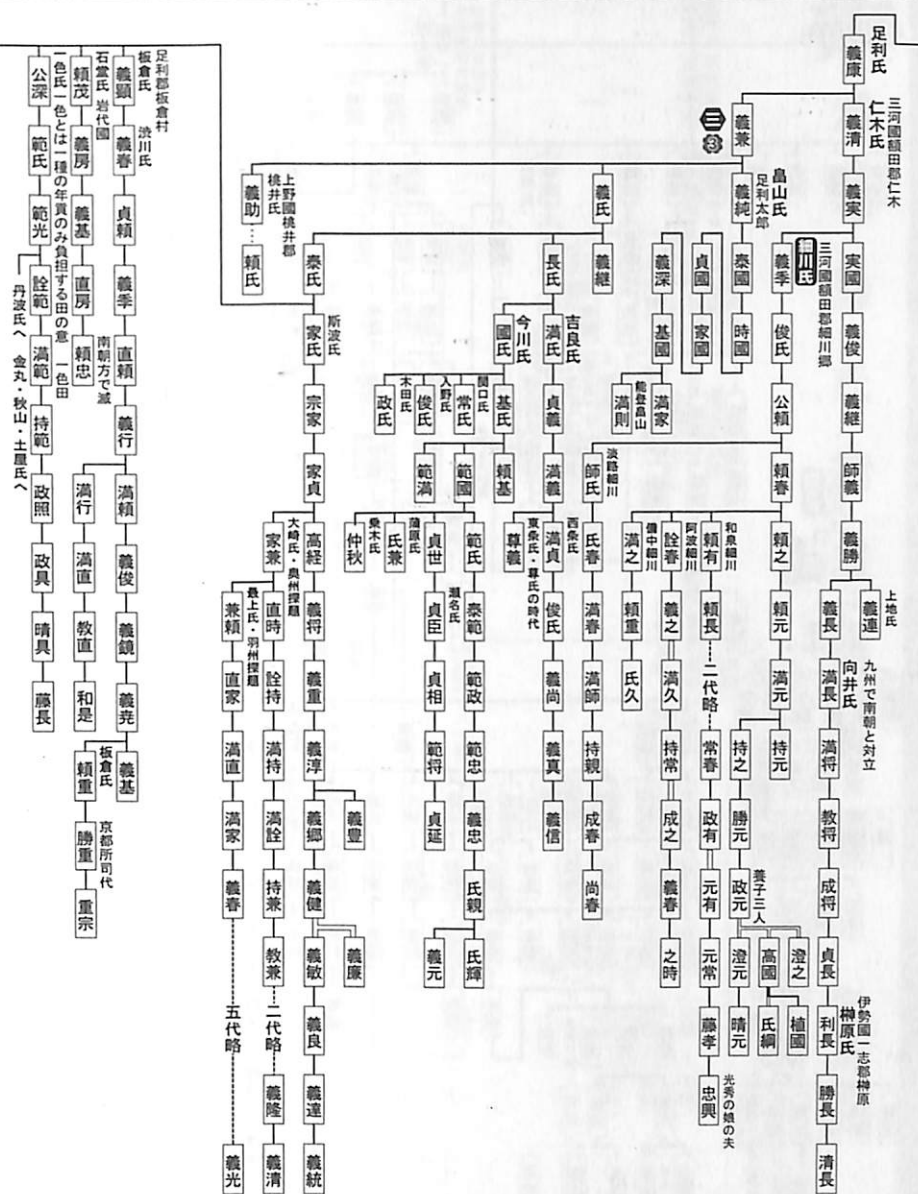


山名伊豆守義範 大内相模守惟義
 足利上総介義兼 加賀美信濃守遠光
 平賀越後守義資 源伊予守義経

① 山名義範 ② 大内惟義 ③ 足利義兼
 ④ 加賀美遠光 ⑤ 源範頼 ⑥ 安田義定
 ⑦ 安田義資 ⑧ 源広綱 ⑨ 平賀義信



原圖作成・監修
全國山名氏一族会
会長 山名年浩氏
(平成二十五年十月)
全國山名氏一族会平成二十五年總會記念



大地に轟く山名軍団

—和泉・土丸城の攻防—

草山 宏

はじめに

南北朝末期の畿内、“現代で云う紀伊半島”といったいは、日本国の統一安泰を願ひ、其々の勢力が其の考えの下に、命を懸けて戦つていた時代であつた。この時京都では、室町幕府も既に三代将軍足利義満の代に成つていて、畿内の摂津・河内・和泉及び紀伊の一部は、幕将細川氏・今川氏・高氏・一色氏・畠山氏・斯波氏其れに、山名氏・大内氏・赤松氏等が、掌握していた。之に対し、伊勢の北畠一族、紀伊には湊川で討ち死にした、楠木正成の遺児正行・正儀兄弟等、強力な反幕府勢力軍がいた。この様な背景の中、当時の紀伊半島は、両体制による数々の戦い

が幾度も繰り返されていた。

著者は、この数多くの戦いの中から、幕府にとつて、畿内平定に、大きく左右したと思われる戦いに、土丸城をめぐる攻防があるが、この一連の戦いを、土丸城の攻防と題して取り上げ、記録してみた。

倒幕軍来る

正平二十三年（一三六八年）未だ畿内には、室町幕府に対する、反幕府勢力が、各地に点在していた。この年、征夷大將軍に任じられた足利義満は畿内平定を目指し、楠木党を中心とした、反幕府勢力と戦いつつ、正平二十四年、幕府の管領、細川頼之による仲介の下、楠木正行の弟、東

条城城主、正儀と、和平交渉を続けていた。

尚、先に記した正成の嫡男正行は、正平五年河内四條畷に於て、高師直・師泰兄弟の、六萬に及ぶ大軍を相手に戦い討ち死にしている。従つてこの時、楠木一族の棟梁は正儀であつた。

天授四年（一三七八年）紀伊に於いて倒幕の機運高まり、義兵を募り挙兵、率いるは、楠木十六将の一人、橋本判官正高である。

正高軍は、紀伊を出陣、途中、神宮寺師総軍、宇佐美正種軍等と合流の後、紀伊の守備隊、幕将細川業秀軍を襲撃、業秀防戦するも多勢に無勢、抗しきれず総崩れとなり、辛うじて淡路へと敗走した。

正高軍勢を増し、紀伊から和泉へと兵を進め、土丸城を占拠、ここに正高軍の旗印を掲げた。

泉州土丸城

此処で土丸城の概要について記しておこう。土丸城は和泉と紀伊の国境沿いに位置し土丸城から北東へ50メートルの所に雨山がある連山を形成

し、断崖に継ぐ断崖の天険の要塞の如く、様相を成している。幕府にとつて、和泉防衛上、戦略的重要なる最前線の城である。（図書1・2を参照。）義満、正高の進撃に驚き、細川兵部太夫氏春に、土丸城奪還を命じた。氏春、和泉の国人衆三千騎を従え土丸城を包囲、攻撃を開始した。だがしかし、倒幕軍奇策を駆使。城中よりの攻撃激しく、大石小石を雨霰の如く投じてきた。

兵部太夫の尖兵、城壁に迫り着くも、盾冑は打ち碎かれ、手足は潰され、櫓の窓塼の狭間からは、射手の狙い撃ちとなり、兵部太夫、軍慮に詰まり、急ぎ京に飛脚を立て、義満に援軍を要請した。「多勢に無勢、土丸



図1、左・土丸城、右・雨山城

城の正高軍、日増しに兵力を増し、今や其の軍勢、二萬騎に迫る勢いなれば、急ぎ援軍之あるべき」と記している。

義満之を聞き、細川右京大夫頼元、及び山名軍を中心に、援軍を組織、右京大夫頼元・山名修理太夫義理・同舎弟民部少輔氏清・同右馬頭時正・同播磨守満幸・同中務少輔氏親・同五郎時理・同弟草山駿河守氏重、都合その勢三萬餘騎（橋本正高事蹟より）を兵部太夫の指揮下に入れ十二月二日に京を出陣、同五日には全軍土丸に着陣。土丸の山野を山名軍団が埋め尽くした。

正高之を見て「人々あの大勢を見よ、斯かる大敵に当たつてこそ春ならぬ軍に、花をも散らすべけれ、望むところ大勢来たつて、城を囲む事こそ幸なり」と言しめた。

正高は手勢を三手に分け、須山隊一萬五千騎を自ら率い一勢は田辺八郎成忠三百騎、又一隊は平尾次郎満幸百騎、其々炬火を投げ打ち、右京太夫軍の兵舎を焼き払い夜襲を掛けてきた。

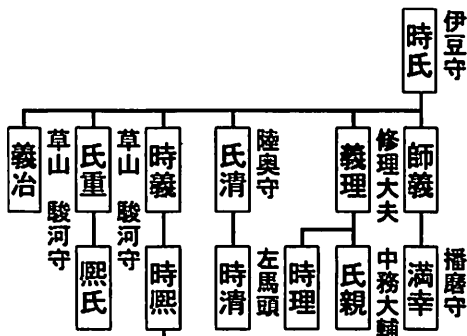
右京太夫軍一時は大混乱となる、この時、敵の

側面へ突撃した部隊があつた。氏春軍である。頼元これを見て態勢を立て直し、反撃に転じて敵軍を撃退、城中へ背走させたのである。

明くる六日、幕府軍による総攻撃を、圧倒的大軍をもつて開始、中央に総大将細川氏春、右翼に右京大夫頼元、都合一萬五千が進撃、之に対し正高軍の主力一萬二千が対陣した。

山名軍一萬八千は城の正面より進撃を開始した。守る城中には和田正尹軍僅か四千騎餘り。

正尹軍意外にも城中より出撃、頼田の要塞の前



文中に登場する山名一族

面まで兵を進め、小高い丘陵地帯に陣を張った。山名軍は先ず満幸軍四千騎が突撃を開始、続いて氏重軍三千騎が先陣を争い敵陣に殺到した。

正尹軍、要塞より



武者イメージ（本編とは無関係）

弓矢の攻撃を激しく打ちだし、山名軍の進撃を阻止、此処で両軍の激突により激しい攻防となった。

城将正尹の地の利を生かした攻撃に、山名本隊の義理は、満幸・氏重をいったん退かせ、代わって氏清軍五千騎を敵陣の前面に押し出し、義理軍のうち次郎氏親隊一千八百騎を右翼へ、五郎時理隊、一千騎を左翼へ配置して、敵陣を包囲壊滅するべく攻撃を開始した。

正尹軍、三方よりの攻撃に耐えられず、先ず中央の防衛隊が崩れ、要塞へと退却、次いで全軍が、頼田・八幡の要塞へ退き、防衛体制を敷いたのだが。

之に満幸・氏重も加わった山名全軍が襲い掛かる。一萬八千の猛攻である。

正尹軍、山名の大军に對し頑強に防戦、抵抗を繰り返したが次第に抗戦に耐えられず、最

後の防衛線も放棄、城中へ退却して籠城の態勢をとった。

山名軍は攻撃の手を緩めず之を追撃、義理は本丸へ、氏清は雨山へ、軍を二手に分け一気に勝敗を決すべく、両城に迫った。氏清軍は雨山攻略を最短距離の側面攻撃と決し全軍一気に崖を駆け上がり要塞に突入せんと試みたのだが、城兵の反撃鋭く、城中より投げ打たれし落石の激しさに、苦戦を強いられ、氏清は一旦兵を治め、氏重の「本丸に背を向けては、正尹軍に挟み撃ちになる恐れあり」との進言を「本丸は兄上が攻撃を仕掛けているはず」と退け、雨山と本丸の間の丘陵地帯に兵を進め、正面突入に作戦を切り替え攻撃を開始した。

一方本丸に迫った義理軍は城中の抵抗に合い一進一退を繰り返し、僅か三千の城兵に、八千の軍勢が釘付けにされていた。

雨山の正面突破を成功させ、之を制圧した氏清軍は取って返し義理に合流、本丸を包囲した。今、正に土丸連山は、山名軍団の將兵で満ち溢れ、土

丸城の落城は目前に迫っていた。(花營三代記に
は、時義軍の猛攻により、本丸を占拠)と記され
ている。

だが然し、この時既に、正高の主力軍は幕府の
大軍に抗しきれず、城中の兵糧も乏しく、落城寸
前、巧みに紀伊へと撤退して行った後であった。

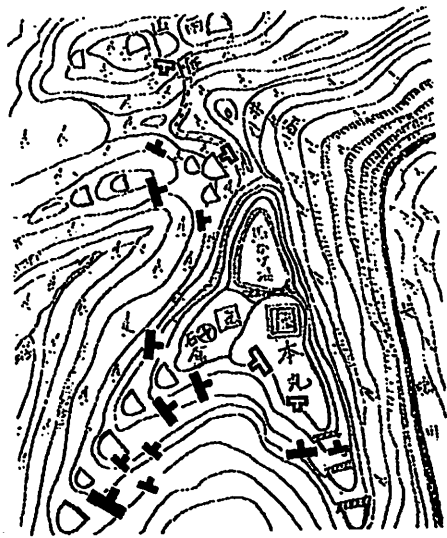
氏清の猛攻により土丸城の奪還に成功した山名
軍は、正高を打ち漏らすも倒幕軍の撃退に成功し
て、和泉に平穩をもたらせ、義理は藤代の大野城
へ、氏清は、弟氏重に美作勢二千騎を与え、土
丸城の防備に当たらせ、自らは當城へと、其々
凱旋していった。

そして、戦いに明け暮れた天授四年の晦日も静
かにくれて行ったのであった。

天授五年正月

正高は、山名軍が引くと見てか、翌天授五年正
月、紀伊にて再び倒幕軍を組織、土丸城攻撃に向
け出陣してきた。

山名軍は不意をつかれ、戦闘準備の整わないま



山名軍

討幕軍

ま、正高の軍勢が土丸城に迫ってきた。守るは氏
重、僅か美作勢二千騎のみ、正高軍は、土丸に連
なる雨山と土丸城の間に割って入り、両城の寸断
を図ってきた。

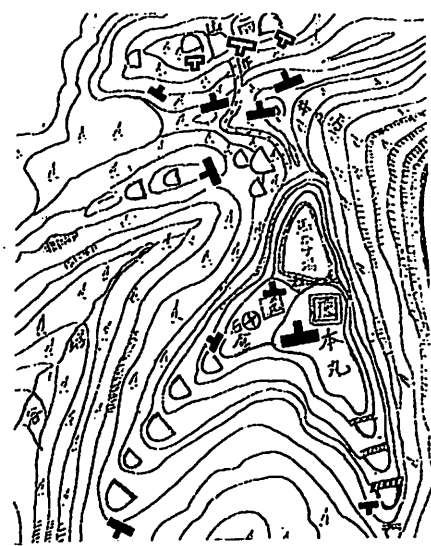
城中の氏重、城の背後を雨山軍に頼り、自らは
城の前面に押し寄せる敵の本隊を迎え撃つべく、
本丸死守の陣形に入った。

正高は、雨山軍を撃破した後、自らは兵七千騎
を率い、城の前面に廻り、前後両面より本丸を攻

撃してきた。

氏重決死の防戦をするも、城門は打ち砕かれ、城中には火矢を射ち込まれ、一時は自刃^{じじん}を覚悟したのであったが、本丸落城寸前、手薄になった雨山方面の敵陣へ、全軍最後の突撃を敢行、敵軍を蹴散らし、雨山城に迫り、これを占拠、そのまま雨山城に立て籠もった。

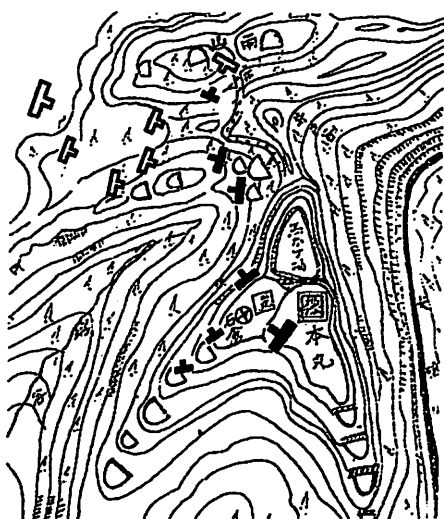
本丸を占拠した正高は、此处に再び正高軍の旗印を掲げ、氏重の立て籠もった雨山城を包囲、明



山名軍



討幕軍



山名軍



討幕軍

くる二十二日の総攻撃の体制に入った。そして二十二日の夜明け、氏重は雨山城にて、最後のときと覚悟を決め、土丸の山々を眺め、そして日根野方面に目を移し、わが身を疑った。雨山城のふもとに、数千の軍勢が迫っていた。旗印は丸に三引、氏清軍である。氏重、九死に一生を得たのである。

氏清は、倒幕軍の混乱に乗じ、一気に攻撃を開始。先ず頼田の要塞を墮とし、次いで八幡・盆の

山と次々に要塞を墮とし雨山の氏重と合流の後、全軍本丸還奪に向け進撃を開始した。

正高軍は、山名軍の快進撃に、総崩れと成り、山中を駆け下り、大鳴川沿いに、紀伊へと敗走していった。

そして、天授六年七月十七日“高良の辺”にて山名軍は、正高軍と決戦に及び、正高軍を圧倒、遂に正高を討ち取ったのであった。

義満これを大いに喜び、義理・氏清に紀伊・和泉の守護職を与えた。氏重は兄氏清より土丸城の守備を命じられ、土丸城城主と成る。

之により畿内平定が成り、弘和二年楠木正勝が、再び倒幕の兵を挙げたが、徐々に倒幕の機運も薄

楠木系図

人皇三十代

敏達天皇 高仁親王 橘諸兄

兼遠

盛仲

正遠

太夫判官

正成

正行

正儀

正勝

れ、暫くの間、畿内に平穏の日々が続いたと云う。

山名系図

人皇五六代

第六皇子

源姓賜

多田源氏

清和天皇

貞純親王

源經基

満仲

河内源氏

頼信

頼義

義家

義国

新田義重

鎮守府將軍

鎮守府將軍

義家

義国

新田義重

足利義康

山名義範

義節

重國

重村

義長

新田義兼

義員

八代後

義員

義長

義長

得川義季

十六代後

家康

家康

家康

家康

義俊

政氏

時氏

伊豆守

伊豆守

伊豆守

義理

氏清

時清

時清

時清

時清

義理

氏清

時清

時清

時清

時清

義理

氏清

時清

時清

時清

時清

義理

氏清

時清

時清

時清

時清

義理

氏清

時清

時清

時清

時清

義理

氏清

時清

時清

時清

時清

義理

氏清

時清

時清

時清

時清

義理

氏清

時清

時清

時清

時清

義理

氏清

時清

時清

時清

時清

義理

氏清

時清

時清

時清

時清

義理

氏清

時清

時清

時清

時清

義理

氏清

時清

時清

時清

時清

義理

氏清

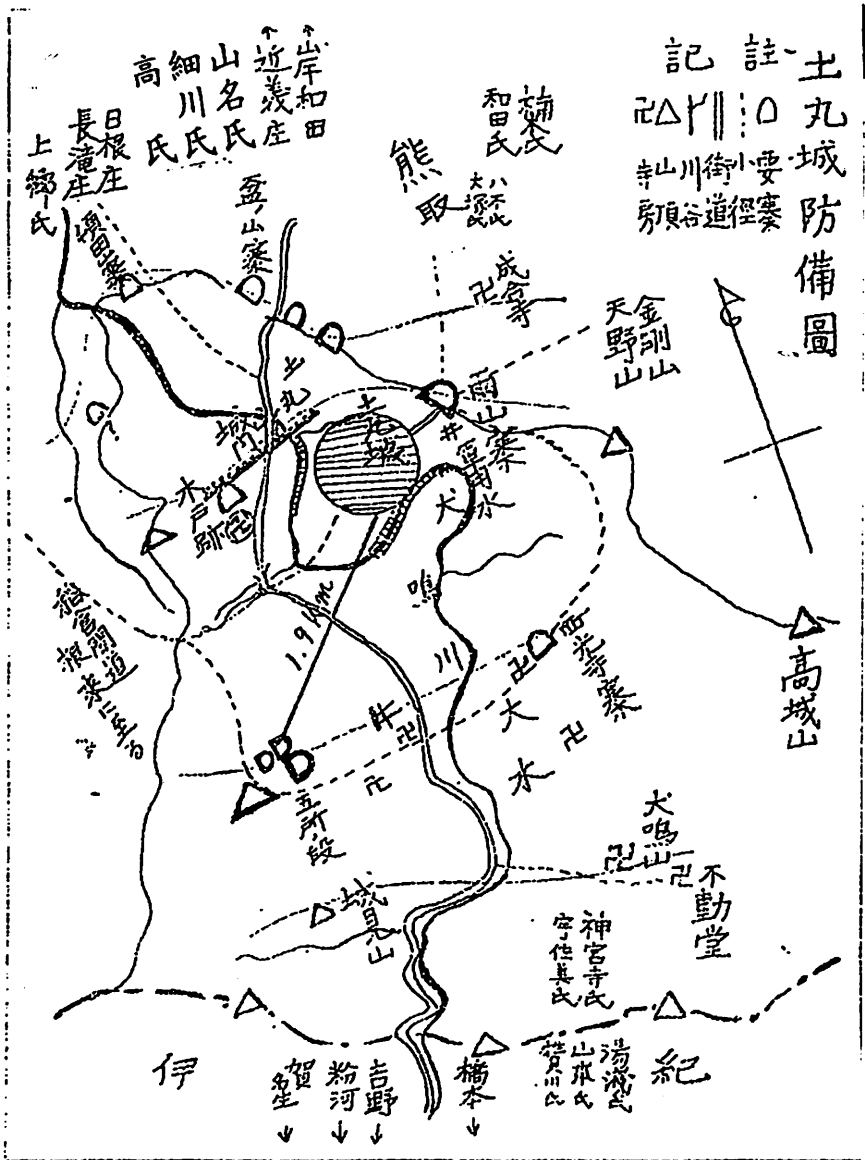
時清

時清

時清

時清

図 2・土丸城防備図



俱利伽羅・五箇山への旅

ルーツを訪ねて――

山名一男

1. 俱利伽羅「山名」について

(1) 俱利伽羅「山名一男家」について

石川県津幡町刈安に在住している山名一男は(旧)俱利伽羅村刈安の生まれである。妻「智香子」は京都市生まれ、京都市育ちで長女「美穂」と長男「康介」の2人の子供をもうけている。一方、山名一男の父親は、刈安の隣地区の上野の生まれであり(俱利伽羅「山名」の発祥の地)。ここの上野は「うえの」とも「こうずけ」とも呼ばず、「うわの」と呼んでいる。また、この(旧)俱利伽羅村は源(木曾)義仲と平維盛の寿永2年(1183年)の源平合戦「俱利伽羅峠の戦い」

の地であり、歴史的にはよく知られた場所である。一方、母親は富山県南砺市にある(旧)上平村(五箇山)の生まれであり、この五箇山は「俱利伽羅峠の戦い」で敗れた平家の落人村との言い伝えがあり、平家ゆかりの地である。その夫婦の子である筆者は源氏と平家の両方の流れを共有している。

(2) 何故この俱利伽羅に山名の姓があるのか

約40年前(1970頃)に祖父から聞いたところによると、昔、山名と名乗る者がこの(旧)俱利伽羅村上野に住み着いたという言い伝え(流れる者)がある。実際に戸籍を調べたところ、江戸

時代後期(約200年前)にすでに山名という姓を名乗る人物が(旧)俱利伽羅村上野に住みついてたことを確認した。一方、地元にある「光現寺」というお寺の住職に尋ねたところ、お寺は古いが江戸時代中期に一度全焼しており、それ以前の情報を持ち合わせていないとのことであつた。

加えて、お寺のデータから祖先を調べることは容易ではなく、正確に把握できるとは限らないとも述べた。また、個人情報取り扱いから、関係者以外の者が勝手に調査することもできない。現段階では江戸時代後期まで正確に掌握できたが、それ以前については全く推測の域を出ない。以上のことを踏まえ、まとめると次のようになる。

①江戸時代後期には山名という姓を名乗る人物が(旧)俱利伽羅村上野に生活していた。

②俱利伽羅は「俱利伽羅峠の戦い」源平のゆかりの地である。

③俱利伽羅の上野(うわの)という地名は高崎市の上野国(こうずけのこく)という漢字に合致する。

以上の3点に加え、俱利伽羅「山名」のルーツは流れ者という言い伝えから推測すると、偶然とは言え、山名氏の発祥の地(高崎市)との繋がりを予感せざるを得ない。正直、会員の方々のように山名家ゆかりの物的証拠があるわけではない。姓や地名等から俱利伽羅「山名」のルーツを推定しているにすぎない。

本報告では、源氏と平家に係ることを中心に、俱利伽羅「山名」の姓の発祥の地である(旧)俱利伽羅村(石川県津幡町)を紹介する。また母親の生誕の地である(旧)上平村(富山県南砺市五箇山)についても述べる。また、地域で活発化している大河ドラマ「義仲と巴御前」の誘致活動についても触れる。この活動紹介が「全国山名氏族会」のPR活動の参考になれば幸いである。

2. (旧)俱利伽羅村(石川県津幡町)について

(1) 源平合戦について



図3 平家の落人（平谷に残る平知度の墓）

置させ、夜が更けるのを待っていた。夜半に北側の黒谷の方角から、4、500頭の牛の角に松明を付け、4万余騎の軍勢とともに平家の陣に突入した。昼間の進軍で疲れ切っていた平家軍1万8千余騎は、源氏軍の奇襲に混乱し、何もできずに追い詰められ、人馬もろとも地獄谷に突き落とされたと言われている。

率いる源氏軍を待ち構えていた。一方、義仲は埴生八幡宮（富山県小矢部市）で戦勝祈願を行った後（図2）、平家の動きに合わせて味方の軍を7手に分け配

〈平家の落人〉

津幡町内には、平家伝説が数多く残っている。河合谷地区の牛首・木窪の両区を始め、津幡地区の平谷や英田地区の菩提寺区は、平家の落武者が村の開祖と伝えられている。また、平谷には平知度（平清盛の7男）の墓とされる首塚が残っている（図3）。また、この平谷には平のつく平村、平林、平野、平谷、平田等の姓が見られ（現在は空家）、平家の足跡をしのばせる。菩提寺から近い「上矢田温泉・やたの湯」は、義仲に敗れた維盛がこの湯を見つけ、傷を癒したのが始まりとされている。

〈「俱利伽羅峠の歌」について〉

この歌は、筆者「山名一男」の母校である刈安小学校に代々伝わる歌である。源平の俱利伽羅峠での戦いを歌にしている。歌は9題までであるが、3題まで以下に記す。作詞者は、八波則吉氏、作曲者は大西安世氏であるが、歌が作られた年月日

やいささつについては、詳しくはわかっていない。

1 木々の若葉に風かおる

ひうちが城をおとしいれ

維盛の軍七万騎

寿永二年の夏のころ

幸先よしと勇み立つ

砺波山にぞ陣をとる

2 埴生の宮に祈願こめ

七手のいくさ所々に伏せ

八幡林あとに見つ

必勝期せる木曾が勢

義仲万騎の将として

黒坂口にぞ陣を取る

3 陣と陣とは程近し

源氏方より三十騎

上矢の鎧一どきに

矢合わせの時至りぬと

楯の面にあらわれて

平家の陣へ射入れたり

へ「源氏太鼓」について

源氏太鼓や源平騎馬戦など、木曾義仲が勝利した倶利伽羅源平合戦にちなんだ催し物が（旧）倶

利伽羅村で今でも行われている。伝統芸能「源氏太鼓」は、倶利伽羅峠の合戦の大勝利を祝って打ち鳴らした「勝利の太鼓」が始まりとされる。後継者が少なくなる中、この「源氏太鼓」を継承しようとして、（旧）倶利伽羅村九折（つづみおり）では源氏太鼓保存会が刈安小学校の児童や卒業生を指導し、各種の行事で披露している。

（2）倶利伽羅不動寺（不動尊）について

時代は源平合戦より古くなるが、倶利伽羅不動寺にはかつて、718年（養老2年）に弘法大師が建てたとされる七堂伽藍と十二ヶ寺が建立されている。倶利伽羅不動寺にはインドの高僧善无畏三藏法師の彫刻と伝えられる倶利伽羅不動尊が奥之院に奉安され、成田不動尊（千葉県）、大山不動尊（神奈川県）と並び、日本三不動尊の一つとして知られ、県内外から多数の参詣者が訪れる。地名にもなっている「倶利伽羅」は、「剣に黒い

龍の巻きついた不動尊像」という意味のインドのサンスクリット語に由来する。

（3）歴史国道「北陸道」について

北陸道は古代から官道・五畿七道の一つに数えられ、都に通ずる道として栄えてきた。時代は新しくなるが江戸時代に入ると加賀藩の参勤交代の道として整備された。俱利伽羅越えの街道は、明治13年（1880）の明治天皇の北陸行幸に合わせた天田峠の新道開削により、車社会が著しい発展を遂げる以前に旧道となったため、往時の風情が色濃く残されており、平成7年、歴史国道に選定され、整備が進められている。

3. 五箇山（旧）上平村）について

（平家の落人）五箇山について

五箇山は古くは平村、上平村、利賀村の3村を五ヶ山と称していたものを、赤尾谷、上梨谷、下

梨谷、小谷、利賀谷の谷に囲まれてた集落を5つに区分して五箇谷間と呼ぶようになり五箇山の地名が生まれた。飛騨国、越中国の国境に接していたため、両国の文化の交流の場であると同時に、周囲を山で囲まている隔絶した地勢から独自の文化が継承されてきた。そのため、五箇山には俱利伽羅峠の戦いで木曾義仲に敗れた平家の落人が住み着いた伝説等が残っている。この五箇山の落人伝説は、1806年に島翠台北茎という人によって書かれた「北国巡杖記」が初出と言われている。旧村名である「平村」「上平村」は「平家」から来たものであり、また「上平村」には落人屋敷や控え屋敷があるという。

（合掌作り）

五箇山の冬は全国的な豪雪地帯であるところから茅葺の急勾配屋根が大きな特徴の合掌造り民家が発展し（図4）、現在でも相倉集落や菅沼集落では当時の風景が色濃く残り『越中五箇山相倉集



図4 合掌作りの家（菅沼集落）

川郷・五箇山の合掌造り集落』として『世界の文化及び自然遺産の保護に関する条約』に基づく世界遺産リストに記載された。

〈麦屋節〉

麦屋節は、富山県南砺市五箇山に伝わる民謡で

落』、『越中五箇山菅沼集落』として昭和45年に国指定史跡に指定され、平成6年に重要伝統的建造物群保存地区に選定された。平成7年には岐阜県の白川郷とともに、『白

ある。唄の歌詞には「波の屋島を遠くのがれ来て」、「烏帽子狩衣脱ぎうちすてて」、「心淋しや落ち行く道は」など落ち行く平家一門の姿を唄っているため、砺波山（俱利伽羅峠）での源平の合戦（俱利伽羅峠の戦い）に敗北した平家一門が落ちのびて庄川上流の五箇山に隠れ住み、絶望的な生活から刀や弓矢を持つ手を鋏や鋤に持ち替え、麦や菜種を育て安住の地とし、在りし日の栄華を偲んで農耕の際に唄ったのが麦屋節の発祥と伝えられている。平紋弥が伝え教えた「もんや節」と呼ばれたものが、唄の出だしが「麦や菜種は」と唄われるため、麦屋節に変化したと言われている。

4. 大河ドラマ「木曾義仲と巴御前」の誘致活動について

富山県、石川県等では、俱利伽羅の源平合戦（1183年）で知られる木曾義仲と巴御前を主人公にしたNHK大河ドラマの実現を目指している。（旧）俱利伽羅村（津幡町）でも、「木曾義仲

と巴御前」を題材としてNHK大河ドラマ化を指した各種の行事を行っている。俱利伽羅が舞台となった源平合戦を通して、平家を打ち負かした源氏の武将、木曾義仲と義仲に寄り添い戦功をあげた「日本のジャンヌ・ダルク」ともいわれる巴御前の大ロマンスを、何とか21世紀のテレビで再現しようとしている。俱利伽羅源平合戦の最大のヤマ場は、義仲を勝利に導いた「火牛の計」であり、角に松明を付けた牛（火牛）の大群が、平家軍に突っ込み、数の上で劣勢だった義仲軍が勝利したとされている。

全国山名氏一族会にとっても、武家文化の初期から、鎌倉、室町、江戸、そして現代まで子孫が永遠に続いており、全国的に見ても大変めずらしい、貴重な一族会である。例えば「山名氏800年の歴史」というような題材をテレビドラマ化への企画提案を行うことを提案したい。とりわけ、ダーウィンが提唱する「強いものが生き延びているのではなく、環境に適合するものが生き延びて

いる」という歴史的事実を、現代に生きる人々や企業活動と重ね合わせ、視聴者に共鳴を与え、示唆するような山名氏の歴史的価値を高めるPR活動を活発化することを願う。

（参考文献）

- （1）津幡町ホームページ（観光ガイド）
- （2）南砺市ホームページ（観光ガイド）
- （3）「乱世を駆ける」、木曾義仲と巴御前刊行委員会編、北日本新聞社
- （4）私信、大河ドラマ（企画案）「義仲と巴」、富山県
- （5）NHK大河ドラマ放送要望書「義仲と巴」、津幡町
- （6）義仲・巴出世街道マップ、富山県

— 役員紹介掲載を機に、自らの出自を顧みて —

用人席流『田^た公^ぎ氏流三宅氏』

吉川廣隆

役員紹介掲載に際して

法雲寺境内に有る山名氏史料館「山名蔵」をご案内する際、参観者に次のようにご説明している。

「山名氏は清和源氏の名流で、鎌倉幕府成立から室町・江戸と各幕府に籍を置き、武家政治の始まりから終焉まで見届けた唯一の武家なんです」と、それをお聞きになった多くの方が、「山名家は今でも続いているんですか?」とお尋ねになる。

「勿論、明治維新で東京に出られて戦後までは華族として続き、平成の現在もまた村岡山名で十五代、山名歴代としては三十数代として続いています」とお応えする。

そんなやりとりの中で、時に「……住職は山名

の子孫なのですか?」と尋ねられることもある。参観者の期待を少し裏切るようで申し訳ないのだけれど「残念ながら、私は山名氏とは無関係。たまたまこのお寺の住職をしているだけの縁なんですよ」と……お答えする。

会誌「山名」第5号の発行に際し、全国山名氏一族会(以下・山名会)の再出発の意味も含めて、山名会の新役員紹介の頁を設けた。個人情報保護が言われる今日ではあるが、総裁様を始めとして常任理事まで各位にご協力を願ひ皆さんの経歴や会に対するコメント、出自まで掲載させて頂いた。

山名会の性格上、会員のお大半が山名姓であり、山名姓以外の方も山名氏との因縁浅からぬ姓を家祖以来護られて来られた方ばかりである。

役員紹介であるから事務局の私自身も載せない訳にも行かない。しかし、先ほど記したように私は『〇〇国山名流』と言う繋がりには無く『法雲寺二十世』としか書きようが無い。趣味のこともでも付け加えようかと考えたが、それも少し筋違いのような気がする。事務局として皆さんにあれこれとお願いする立場でも有り、何かそれらしい尤もな形容は無い物か？

今まで自らの出自について考えたことも無かったのだが、何とかたどり着いたのが『田公氏たぎみ（但馬国人）流三宅氏』という一片。このことについて少し頁を頂き、ご説明させて頂きたく思う。

法雲寺と吉川姓

法雲寺は村岡山名氏の菩提寺、天台宗の寺院となつてから私で二十代となる。明治までは天台宗僧侶の妻帯は認められなかったので、十八代（私の祖父）まで歴代住職は、檀家や縁故の子供を弟子として預かり後継者として養育し次代へと繋げて来た。

私の姓『吉川よしかわ』は、十五代住職が明治の初め『平民苗字必称義務令』が發布されてから付けた名字らしい。因みに十五代住職が口吉川村くちよかわむら（現兵庫県三木市）出身で有った為、吉川とした。至って明快な命名法と言える。その後も数代弟子を取り養子とし、吉川姓を名乗らせ寺院の後継者とした。

十八代であつた私の祖父も同じくである。檀家総代を務める家の出で五男一女の四男であつた。旧姓を三宅といい法雲寺に養子として入つて吉川へと姓を改めた。祖父は三女を設け、長女に播州書写坂本（赤松氏の旧本拠地）・圓藏寺より婿を取り、十九代住職（前住職・父親）とし、そして現在の私へと続く流れとなる。

吉川姓そのものも明治以降の5代しか無く、血の繋がりにから見れば、祖父から数えての三代しか続いていない。

此処までの状況では山名氏との直接的な繋がりは見出し難い。

七美郡誌に曰く

郷土の歴史研究の基礎資料としてよく利用される書に『七美郡誌』（医師・八木玄蕃著）がある。明治39年に刊行された同書は変貌を遂げる時代において明治以前の名残を尋ねる貴重な手がかりである。その七美郡誌の中に氏族についての記述が有り、祖父の実家「三宅氏」も記されている。その書き出しに曰く

○三宅氏 平姓 田君氏 ……本國但馬

人皇卅七代孝德天皇第三之皇子部表米王

次男從八位下朝來大領荒嶋宿禰 十七代但馬

國養父郡朝倉領主朝倉餘三大夫宗高ノ嫡男太

郎大夫平高清入道景雲ノ四男四郎清景二方郡

田公庄七釜（新温泉町七釜）ニ居シ故ニ以テ

氏ト為ス 田公庄一圓七味郡一二部庄（香美

町村岡）小代庄（香美町小代）合テ三庄ヲ領

シ

とある。

（読みやすくするため空白等を入れています。また、『七味郡』は『七美郡』の旧表記）

三宅氏というのは平姓で、元は田君（公）氏。

孝德天皇の孫である表米王を祖とする、日下部氏の朝倉から更に枝分かれた田公の流れを受け継ぐ氏であった。

尚、表米王を祖とする日下部氏の同族には朝倉を始め八木・太田垣・宿南・田公・奈佐・三方・西村等…分かれた但馬国人は数多く、新田氏から分かれた山名氏が土地の名を取って氏とした如く、枝分かれた日下部一族もまた、それぞれが本拠とする所の地名を名乗って氏とした。各氏由来の地名や河川名は今でも使われている所が多い。

朝倉自体は日下部氏であるが、朝倉宗高・高清親子が、平家に仕え源平合戦では平家に属したことから平姓を使用し、田公もそれに習った。（「日下部系平氏」とでも言えいいのか？）

七美郡誌を読み進めると

四代（田公）半兵衛尉景實 山名光孝寺殿（時

氏公) 圓通寺殿 (時義公) ノ麾下トナリ美作
守ト改メ七代田公伊賀守綱景入道宗榮 信州
善光寺ヲ勸請シ出石入佐山ノ麓吾邸ノ側如來
寺ヲ創建シ勅額ヲ賜フ： (略)： (田公) 能
登守綱典入道秋庭天正五年 (1577) 丑十
月六日 (秀吉の中国侵攻により) 城山 (香
美町小代区城山) ノ本城黒野邑 (村岡ノ旧名)
支城其他ノ砦悉ク捨テ城山ヲ退城シ因州氣
多郡宮吉城主全氏 (田公) 新助高家ノ館ニ遁
レ 全九年 (1581) 十月久松 (鳥取城)
落城ニ及ビ但因ノ山名大二衰ヘ主従共流浪シ
出石町 (宗鏡寺塔頭) 正受院ニ流寓ス 全十
年 (1582) 三男宗彭^{そうほう}唱念寺衆譽上人ヲ頼
ミ僧トナシ 慶長九年 (1604) 二月山名
禪高 (豊国) 入道公ニ仕ヘ執事トナリ知行高
百石ヲ賜リ 全十一年霜月十五日卒大休院殿
前能州太守雲峰以閑卜^{いかな}諡ス 其ノ子采女澄
典父ニ繼ギ用人タリ

と続く。

山名氏が但馬守護として但馬入りした折りには

既に五ヶ国の太守であり、但馬国人としてはただ
ひたすらに恭順の意を示すのみであつたろう。八
木・太田垣等始め他の同族と共に、田公氏も山名
氏の指揮下に入り、旧來の領地を安堵して貰い、
室町時代は山名四天王に次ぐ立場で過ごしてい
たのであろう。

しかし戦国時代に入り豊臣の但馬・因幡攻め以
降は流浪生活を余儀なくされ、徳川幕府の世とな
り豊国公が七美郡を与えられた折りに多くの旧臣
を呼び戻した中、田公氏も石高百石で執事として
迎えられた。以降、田公氏は代々執事・代官や用
人として村岡山名に仕えて居たようである。

尚、文中に「宗彭^{そうほう}」とあるのは沢庵和尚の事。

沢庵は天正元 (1573) 年生まれ。天正十年
10才で出家したと言わる。もし天正五年に父らと
共に因幡に出ていたとするなら、5才以降の5年
間苦しい流浪生活を重ねた後の出家と見ることが
できる。(沢庵和尚が田公氏の出と言うのは誇ら
しいところではあるが、和尚の出生には、三浦氏
系秋庭氏という説が一般的らしい。七美郡誌では

田公氏として記載している。）

元々、田公氏は但馬・因幡の国境沿いに勢力を張った家臣（豪族）であった。鳥取城落城前後、因幡に居たのであれば豊国公に従い、辛酸を共にしたで有ろうことは十分に想像できる。

それ故、田公縁の旧領（七美郡）に復帰した豊国公は出石で寄宿生活をしていた田公を呼び寄せて頂けたのかもしれない。七美郡誌を先に進めると

澄典長男大八郎澄正 山名法雲（村岡山名2代・豊政）公 芳心（同3代・矩豊）公ニ仕へ代官兼用人三郎兵衛ト改メ執事トナル 寛文九年（1669）酉正月廿七日卒普明院骨宗榮換ト諡ス 男子無ク而シテ三宅又之丞高正嫡子ヲ以テ嗣トス 三宅久助ト云ヒ又田公三郎衛ト改メ 後二三宅ト云フ目代兼執事連署 芳心公覚圓（同4代・隆豊）公ニ仕へ：

村岡山名2代・三代に代官兼用人として使えて

いた田公三郎兵衛には男子がなく、三宅氏の嫡男を跡取りとしている。その後は家督相続以前は三宅姓を名乗り、公職に就いた折には田公姓を名乗りと時に応じて二つの姓を使っていたらしい。

此処になって初めて三宅の名が出てくる。三宅氏自体、氏の発祥地を八木氏の本拠地・養父郡八木に隣接する養父郡三宅とするなら、元々は八木氏の分家と考えるのが妥当か？また、「三宅又之丞」の名は、天正五年の田公氏因幡遁出後に起きた田公残党による「小代一揆」にその名が見える。

それまで八木・太田垣・田公等の有力国人に比べ影が薄かった三宅としては今までに無い大きな出世と言える。その後、村岡山名6代の豊暄公の時代までは田公の跡取りとして順調に勤め上げたのだが、再び七美郡誌に曰く

（寛延三年・1750）三宅庄之助保高 即心院殿（村岡山名6代・豊暄）ニ仕へ 幼ヨリ病身ニテ仕官ヲ嫌ヒ帰農ヲ願ヒ御聞濟トナリ居屋敷宅及ビ連^{れんじやう}堯湯ノ處方薬品薬種用具一切ヲ賜リ御暇ヲ下サレ本町南側ニ住ス 三

宅安兵衛ト云 全（宝暦）九年（1759）
卯三月廿四日以後代々苗字御免目見衆三宅ト
稱ス

村岡山名藩で代々中堅どころの役職を得ながらも、残念ながら6代豊暄の頃、保高は病弱を理由に帰農してしまう。

三宅の帰農を残念に思つて頂いたのか、破格のご配慮を頂き御役御免となる。その後も三宅を名乗り庄屋として続いたらしい。

因みに「村岡藩士帰農帰藩及暇絶家表」には、

一、高百石 給人兼代官見習 田公安兵衛平保高

宝暦十三年病氣ニ依り帰農

と記述が見える。（田公安兵衛平保高Ⅱ三宅安兵衛Ⅱ三宅庄之助保高）

そして時代は明治に入り、三宅の分家の中に子沢山の家があつて、その四男を法雲寺・吉川上

人の元に養子に出す話へと繋がってくる。

弟子養子で繋いできた祖父以前の吉川姓（法雲寺）には血の繋がり無く源流を遡ることは出来ないが、祖父の系統からみれば、「田公氏流三宅氏」と言えなくもない。

さて村岡山名藩で田公・三宅が役職として頂いていた『用人』とはある辞書によれば、「江戸時代の武家の職制のひとつで、主君の用向きを家中に伝達して、庶務を司ることを主たる役目とし……」とある。これは現代風に言えば『事務局』のような役職であるのか？。そう考えると何か逃れられない因縁めいたものを感じる。

遙か先祖がお暇を頂戴するに際し、藩公より家屋敷そしてお薬一切まで頂いたご高恩には、遙かに及びませんが、私なりに精一杯、山名会を盛り上げて行きたく思うところです。

伊勢山名氏について

山名大介

伊勢山名氏は、初代義遠（一説では、その父義隆）が慶長年間に、近江国花曾呂村より、伊勢国洞津（わたつのつ）転じて安濃津、現・三重県津市）に移住し「修天爵書堂」という名の寺子屋（日本庶民教育史によれば三重県では最古、日本でも記録に残るかぎりで10番目に古い寺子屋）を開いたことに始まる。

修天爵書堂はその後、代々の当主に引き継がれ、250年程後の幕末、安政年間に津藩（藤堂氏）が庶民の為に「修文館」を設置して、その幕を閉じた。藩祖（藤堂高虎）以来、山名家は客分として藩公の別邸を与えられ、知行を得て藩士子弟の教育にも携わっており、伊勢国の教育の草分け的存在であったといえる。且つ又、神職を兼ねており、藤堂家ゆかりの神社を管理していたようである。

三代目の山名政胤は国学者として世に知られたよ

うで かだのあずましろ 荷田春満、その弟子の賀茂真淵、更にその弟子の本居宣長と交際が続き、本居家とは姻戚関係となつている。その後も代々教育者を天職として、明治期には、山名留三郎が陸軍士官学校教官として、乃木希典大将の子息達を教え、乃木氏とも交流があったようである。

初代義遠以後その教育内容は文武百般に及び、その蔵書の余りの多さに私の祖父、まさお政大が昭和16年に、その一部（千余冊）を三重県立図書館に寄贈し「山名文庫」として残ったが、それ以外は戦災で全て焼失してしまった。家伝の宝刀（備前・助吉銘、室町時代中期の作と伝承）は、平成18年に名古屋市立歴史博物館に寄贈、年に数回展示されるのみである。

「仏」と「槍」と「五百年」

赤穂専念寺住職・山名義範

自然

専念寺の前には弥生遺跡がある。田圃から瓦を焼く粘土を掘っていた頃、土器や貝殻、たき火の跡が多く見られた。近くには兵庫県清流一番の「千種川」が流れ、春は鶯や時鳥の声に覚め、秋には鹿の物悲しい声を聞く。風光明媚でJRの新幹線が鉄橋を渡る写真がカレンダーの表紙を飾り、TVのコマーシャルでは西日本への旅が毎回放映されている。

人

二十年前、法雲寺の前任職吉川廣昭氏が遠路但馬から赤穂の専念寺に來られた。

十五年前、赤穂中学校勤務の時、PTAの理事

の山名嗣宣^{しのぶ}氏と出会う。

十年前、専念寺開基五百年法要の時、山名年浩会長・吉川廣昭氏に臨席を賜る。山名会の総会は第七回（平成四年）の群馬の山名神社から参加。

伝

播州山名は山名政豊播磨撤退（長享二年）の後、現在地（赤穂市周世^{すけよ}）に一字の庵を結ぶ。天台宗から浄土真宗（蓮如上人の頃）に転派。寺には一本の槍がある。先祖の墓は三基。庫裏の庭先に時代は不明だが菩提樹の根元に丸石の墓が二基。本堂の南には天保九年（1838）雲華院（頼山陽の師）の碑文の刻まれた墓。

他に境内に大きな銀杏の木と一子相伝の漢方薬がある。終戦後六・七年は定価二十円で近隣の人

々が買いに来ていた。漢方薬の成分を友人の医師に聞いたら利尿作用があると教えてくれた。但馬の山名義鶴氏の名は昭和二十三年、衆議院議員だった父から聞いた。私の記憶が確かな内に子や孫に伝えておきたい。

全国山名氏一族会も播州の山名家も絶えることはないと確信している。

花びらは散っても花は散らない、人は去っても面影は去らない。

宮田先生同様『山名』は永遠である。 弥 栄

専念寺（赤穂市周世）境内



トピックス

山名氏八百年を語る

8月8日付、読売新聞関西版「謎解き京都」の紙面で、「応仁の乱」に関連した特集で「三つの幕府を生き抜いた一族」と題して山名年浩会長のインタビュー記事が掲載されました。



「宗全公は京の町を戦乱に巻き込んだ一方の旗頭で、武骨という印象が強いかもしれませんが、宗全公には先を読む時代感覚がありました。公家に対し『先例にこだわるべきではない』と言ったそうです。武家の台頭は歴史の必然でした。」

1986年、末裔らで「全國山名氏一族会」を設立し、昨春から会長を務めています。歴史学者も交え、古文書や史跡を調べています。山名氏は清和源氏をルーツに持ち、三つの幕府を生き抜いた由緒ある一族。京都の人にもその功績を知ってほしいと思います。

応仁の乱の遠因にもなった嘉吉の乱で山名一族と戦った赤松氏とは、89年に手討ち式を行い、交流が生まれています。

応仁の乱東軍大将の細川氏の末裔とは、今は交わりがありませんが、仲たがいでいるわけではありません。機会があれば交流を深めたいと思っています。」

この記事掲載により、山名会長の元に幾人か「山名会」への問い合わせがあるようです。少しずつ会員の輪が広がっているを感じています。

山名館案内看板設置

やかた

草山常任理事のご尽力より、高崎市山名町にある光臺寺に山名館の説明看板を設置する計画が進行中です。

光臺寺は山名八幡宮の南東三百メートルの地点に

山名館旧跡と言われる光臺寺



の提案により、この光臺寺の一角に「山名館旧跡」の案内看板設置の話が進んでいます。光臺寺ご住職や地元檀家の皆さんも賛成頂いており、一日も早く看板設置と願うところ。

この看板設置によって、山名町の皆さんと山名会の繋がりが出来、ひいては高崎の山名氏各位が当山名会への関心復活につながればと期待するところです。

位置し、山名初代・義範公から八代・時氏公までが居住された山名館が有った場所と言ひ伝えられています。しかし、館時代から受け継がれて来た遺構など、表だつて山名氏との結びつきを語るものは残されて居りません。

6月に山名町を訪問された草山常任理事

編集を終えて

山名第五号をお届け致します。「年一回、機関誌発行」と会則でお約束をしたものの、果たして総会までに間に合うかどうか大変に不安でしたが、ご寄稿頂きました皆様のおかげをもちまして、機関誌としての形が整いました。

ご協力感謝致します。特に山名年浩会長様には、永年を掛け整理頂いた「清和源氏庶流系図」を提供頂きました。他に類を見ない見易く分かり易い系図かと思ひます。山名会に貴重な財産が一つ増えました。

会誌「山名」第5号

平成二十五年十月十二日発行

編集・発行

全国山名氏一族会

兵庫県美方郡香美町村岡区
村岡2365 山名氏史料館内

(事務局 吉川廣隆)

印刷

岩見印刷(株)

兵庫県豊岡市日高町土居67-1

